

Title	「扇」：日本文化のデザイン的特質
Author(s)	川嶋, 園子
Citation	デザイン理論. 1999, 38, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53298
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「扇」

— 日本文化のデザイン的特質 —

川嶋園子／大阪府立港南高校 神戸芸術工科大学博士後期課程

○はじめに

日本人と扇の関わりをみると単に涼をとる道具というだけでなく、様々な分野や習わしに重要な役割を演じてきていることがわかる。扇は一面では庶民的な日用品であり、一面では神性、呪性をこめた格調高い儀礼品であると同時に美術工芸品であり、日本芸能の中核となる小道具である。

いったいこの多面性は、何故であろうか。日本人と扇の長い歴史の織り成す不思議を思わずにはいられない。

日本文化を構築してきた象徴的なもののひとつとして「扇」をとりあげ、この扇を色々な切り口から研究することにより、日本文化のデザイン的特質を明らかにする。ということをも本研究の目的としている。

○扇の発生

扇には2種類あり、ひとつは「檜扇」(檜木の薄板20~30枚のもとを要でとし、末を糸で綴って摺り畳んで開閉するもの)ともうひとつは、「かわほり扇」(竹の骨に料紙をはり折り畳んで開閉するいわゆる紙扇)である。これは、かみほりから転じてかわほり(吉祥獣のこうもり)の名が当てられたといわれている。

いずれにしても扇は、消耗品として欠損破壊される運命にあったから、歴史の波をくぐり抜け運よく残されたものは、九牛の一毛にも過ぎないであろう。

扇面の遺存するものとしては、平安鎌倉期の神宝としての檜扇や扇面形の法華経冊子として作られた四天王寺蔵のものを除いては、

ほとんどが足利期末から江戸期のものである。このような制約下で、文献や絵巻物等の絵画資料より推論するしかないのであるが、扇の起源を探る試みは為されてきた。

代表的な説としては、①木簡起源説 ②さしは起源説 ③笏起源説 ④びろう扇起源説 ⑤ビンササラ起源説等が有る。

本研究では、どの説が最も妥当であるかを究明することを目的とはしないが、調査収集の結果、扇の発生は書写材料と関連があるという視点から木簡から檜扇への道筋について独自の推論を述べた。

又、扇の形態と使用状況の歴史を辿ることにより、扇が日本で産みだされるに至る文化的裏付けが得られる。とした。

○モノのデザインとしてみた扇

(伝承される職人の技と道具)

伝統工芸の分野で、日本各地の名工の手技を紹介するものは多々あるが、扇の職人について取り上げられることは、少ない。

扇の製作工程は、徹底した分業体制で、23工程以上といわれるそれぞれが、全く別の職人による作業の集積であるのが特徴である。よって、陶芸作家や染色作家は数々あれども扇作家は存在しない。全ての工程を把握することが困難であるため、完成品の扇は知られていてもそれを作りあげた職人の技術を文献にしたのは少なく、各々が工夫し継承してきた道具類の記録についても乏しい。

扇の需要の減少や職人の高齢化に伴い、こういった技術、材料、道具類はもはや絶滅寸前といった状況である。

作業工程は、大きく分類して ①扇骨 ②地紙 ③加飾 ④折り ⑤仕上げ とあり各々の工程は更に細かく分かれる。どれをとっても一朝一夕で身につけられる技術ではない為後継者不足は、深刻である。

これらの現状を京都扇子団扇商工協同組合に所属する多数の方々から取材し、出来得る限り詳細に書き記すことを心がけた。

又、京都では既に室町時代には、扇を作る工房が有り売買されていた。

地場産業としてみた場合、その土地で産まれる必然性と発展する上での十分な条件を充たしたものとして、扇生産は、まさに京都がうってつけの場所であり、現在でも圧倒的なシェアを誇っている。この分業体制の確立を産んだ土壌について考察し、工部と商部とで構成される組合の歩みに着目すると伝統を受け継ぎながら、時に応じたモノづくりを模索してきた歴史が見える。

扇生産には、各時代の持ち手の好みに随意に応じてきた技術力や多様なかたとかたちの財産が有り、元来が極めてマーケティング的な商品といえる。現代の加工産業にも通じるこれからの日本の扇作りについての提言を試みた。

○コトのデザインとしてみた扇

(行為の中の文化的役割)

人々が営む行為の中で、扇は日本の高度成長と反比例して、携帯の必需品ではなくなってしまったが、現在でも「生きた」使われ方をしている古典芸能の世界をとりあげてみた。扇は末広がりというかたちが、何よりも目出度いとされ、神の依り代として強い力を持つという共通認識がある。この事から祝意の象徴として、まつりごとに用いられ、これを様式化することで文様として展開した。加えて日本人のモノづくりに於ける凝り性が、装飾

性に拍車をかけ、扇の意匠化が進んだ。

日常生活行為を芸術表現にまで高めた扇の果たした役割は大きい。

芸能の始源が神への捧げ物であったとして、神楽、猿楽、能、狂言、日本舞踊へと推移するうちに、扇の使われ方が、宗教的、呪術的本質を受け継ぎながら、徐々に娯楽的性格を増していく過程をみることは、興味深い。

又、海外へ伝わった扇の踊りでの使われ方は、運動としての手の動きを強調するものが殆どと思われるが、日本舞踊に於ける見立ての豊富さは、やはり日本独特のオリジナルなもので、他に類例が無い。

落語や講談に於いては、語る場の神性視から白扇を用いるのではないかと論を展開し、それぞれの流儀により、用いられかたと用いるかたちが違うことを紹介した。

そして、古典芸能に於いて扇は「身体表現のメディア」であると結論づけた。

○おわりに

日本文化のデザイン的特質として「かたち」は単にものの形状の追求ではなく「生きるかたち」「暮らしのかたち」「行為のかたち」を重要とする。その「かたち」を導くのは、「文化」「作法」「形式」など「生きかた」「暮らしかた」「行為のしかた」等の「かた」である。扇のかたちは、まさにそれが使われる場、空間、状況により、つまり使われかたによって悉く決定される。

この「かた」と「かたち」に着目するとモノのデザインとコトのデザインとが表裏一体となって扇の多面性を形成し、重層的な精神構造を継承してきたことがわかる。各分野での習わしや約束事により千変万化する扇が、日本文化の中で今後、どのような位置付けとなるか研究を続けたいと思う。